

哲学的知識の限界

高木 健治郎

1. はじめに

「哲学的知識の限界」が発表のテーマです。「哲学」ですから非常の範囲が広く、そしてまた野心的なテーマです。この「哲学」、自然科学と比較した場合、人文科学の代表としての「哲学」という範囲で考えています。そして、「哲学的知識の限界」の「限界」は、本発表では自然科学、特に物理学と比較した場合の「限界」という視点に立っています。これ以上の詳しい議論は本文に飛ぶので、此处ではもう少し、発表の問題意識について触れて行きます。

私は、「哲学」と初めて聞いた時に、「何だか難しそうだ」と感じました。高校を過ぎて哲学の知識が増えていくとそのイメージは実感となりました。論語や中国古代の書物の方がはるかに読みやすかったですし、体験と結びつきました。ホメロスを大学院で読みましたが、こちらも論語などと同じでした。「哲学は難しい」という思いは今でも変わりません。

では、何処が難しいのでしょうか？ こういう問題意識で本論を書いていきます。詳細は「2. 哲学の難しい理由」で述べます。難しい、はずっとありましたが、何かが引っかかって哲学を考えるようになりました。難しさの面白さ、あるいは、面白さが難しさの奥に隠れていたからだと振り返ります。

私は大学で、工学部系の学部に通いました。そこで哲学と工学の違いに気がつくようになり、もっとはっきりと知りたい、となって本論に結びつきました。本論は自然科学、つまり工学的思考から哲学を眺めた場合にどうなるか、という発表です。

専門分野に凝り固まる、という批判が現代の学問状況に対してあります。ここで、工学と哲学の違いとして1つ例を挙げたいと思います。皆さんは携帯電話を持っていらっしゃるでしょうか？ 20代30代では90%以上の日本人が保有しているそうです。携帯電話、これは自然科学の発展と工学の成果によって

生まれたものです。では、何故哲学で携帯電話を作れなかったのでしょうか？携帯電話はたまたまの例外事項で、他の製品なら哲学からでも作り出せたのでしょうか？

いいえ出来ません。では何故でしょうか？ここに哲学と工学の違いがあるのは明らかです。大学にいる時、工学と哲学の違いについて漠然と疑問を持っていました。この問題意識が連綿と私の中で続き、そして今回発表させて頂けることになりました。本論は以上のような問題意識で書いていきます。

また、本論は論としての構成ではなく、発表という形式を考えて、口語調で説明的になるのをお断りしておきます。

2. 哲学の難しい理由

「1. はじめに」で触れたように、哲学は何処が難しいのでしょうか？1つには、論語や春秋やホメロスと違う点にあります。それは物語性や倫理性や規範性を超えた、論理性を求めている点です。書物の内容1つ1つがバラバラで良いという「物語」ではなく、書物全体が1つの論と整合性をなすような、つまり、論全体が合理的である、という意味での論理性を備えている点です。

もう1つは、特に中世哲学以降ですが、現実と遊離してきた点です。目に見え触れられる現象と離れてしまったことでイメージしにくく、かつ、物語などの世界観が描かれないので解りにくくなったのでしょうか。さらに、世界観は個人的な見方ですから、哲学者個人の歴史や好み、癖やパターンを理解しないとなかなかその哲学が出てきた理由が理解できなくなっている点も挙げられます。細かい点はもう、幾点かありますが、この辺で留め置きます。

本論では、「哲学」と自然科学を比較する観点を、最初の「論全体が合理的である」という意味での「論理性」に絞ります。この「論理性」の観点に立って、「哲学」と自然科学を比較して限界を探り出したいと考えています。もちろん、「限界があるから哲学はレベルが低いのだ」とか、「限界があるから哲学は難しくて嫌いだ」という訳ではありません。人間が万能でないように、その人間の作り出した「哲学」から自然科学までが万能で万全ではない、と思います。だ

からこそ、どの点が、どの範囲までが、どのような点に限界があるのか利点があるのかを見極めたい、と考えているのです。

その1つの足がかりとして、若手哲学者フォーラムですから、「哲学的知識の限界」について発表させていただきます。そしてその前にまず、論点をはっきりさせるために、ポパーの反証可能性について述べていきます。

3. ポパーの反証可能性の限界

ここで私の今まで発表してきた主要な3つの論文を振り返りながら説明していきます。専門は科学哲学者のK・ポパーで、彼の反証可能性を足がかりにして来ました。反証可能性を理論の提唱者ポパーは、「理論は、もし潜在的な反証者(potential falsifier)の集合(class)が空でないなら、反証可能である。」¹と考えています。この例としてよく用いられるのが、「**「烏は黒い」**」の文章は潜在的な反証者の集合として「**白い烏**」が挙げられる」という例です。白い烏が発見される可能性が、「**烏は黒い**」にあるのですから、「**「烏は黒い」**という言明は反証可能性を持つ」とポパーは主張するのです。

これに対して、拙論「反証可能性と数学的体系」では、反証可能性に数学的要請が無いことから、自然科学に果たした数学的体系の大きさ、特にニュートン力学から量子論への転換を例に挙げながら反証可能性の限界を指摘しました。また、数学的要請が無い反証可能性は、科学と非科学を区別する境界設定の基準として失敗している点も指摘しました。何故なら、数学的体系のない反証可能性の対象範囲は非常に膨大になってしまうからです。それゆえ曖昧さが生じ、ポパーに対する哲学的な誤解の原因になったのではないかと、とも考えました。

続いて、拙論「反証可能性とテスト可能性」では、反証可能性そのものに踏み込みました。「反証可能性」＝「テスト可能性」とポパーは定義するのですが、「テスト可能性」は一連の定義群によって構成されていました。

ポパーにおける「経験(experience)」が「科学」を用いて定義される概念という点である²。それゆえ「経験」と「科学」と「テスト可能性」、あるいは「反証

可能性」が1つの閉鎖的な定義群を構成している。それは「経験」を「テスト可能性」によって措定し、「テスト可能性」によって「科学」を定義し、さらに、「科学」によって「経験」を定義しているからである。

以上の視点から「テスト可能性」に立ち返ると、先述した「経験と衝突する」という表現が浮かび上がってくる。「経験」は「反証可能性」、あるいは「テスト可能性」によって、形而上学と鮮鋭に区別され定義されているために、「経験」と「テスト可能性」の同語反復的な曖昧さは拭えない。つまり、実行的な手法が対象範囲に含まれるのかどうかの問題が、明確にならない³。そこに「テスト可能性」あるいは「反証可能性」の曖昧性の根底が潜んでいる。

これは拙論「反証可能性とテスト可能性」からの引用です⁴。繰り返しの表現を避けたので要点を挙げると、「反証可能性、あるいはテスト可能性を確かめるための具体的なテストが出来ない」という点です。ポパーの言う「テスト可能性」は、「自然科学のように具体的に実験器具によって確かめられるテスト可能性ではない」という意味です。ゆえに、「ポパーの言う「科学」と一般的な用語としての「科学」は異なっている」と結論付けました。また、「科学と非科学との境界設定」にも失敗している点も繰り返しました。他方、

科学哲学の発信源となった「方法論的な規定によって対象の決定がされる」という考え方は、哲学的視点においては汲み取っておくべきものがあるように思われる。ゆえに、方法論的な規定によって対象が決定されるという点を、数学基礎論(foundation of mathematics)上の主要な3つの主義に類比させ、ポパーの立場を《方法論的直観主義(Methodology intuitionism)》と命名する。

として、評価しました。

最後に、拙論「反証可能性と再現性」です。今までは、ポパーの反証可能性の中に観点を持って検討してきましたが、当論では、ポパーの外、つまりポパーが対象とした自然科学から反証可能性を検討してみよう、と考えました。そこで、自然科学の基礎要件の1つである再現性を反証可能性は満たせるかどうか、を「観察」の点から検討しました。

もちろん今まで指摘した通り、数学的体系が欠如している点はあります。それに続いて「観察」の点について踏み込みました。

ポパーは「観察可能性」を無定義としたが、「相互主観的なテスト可能性」の観点から捉えると「観察可能性」は、「時間空間的に近接に、それゆえ日常的な経験に限られる観察」であった。また、理論の反証可能性を、ポパーは「理論は、もし潜在的反証者(potential falsifier)の集合(class)が空でないなら、反証可能である。」⁵と考えている。そして「潜在的反証者の集合は、基礎言明の集合」⁶とする。反証可能性を支える基礎言明は、先に述べたように「基礎言明は、「観察」によって相互主観的にテスト可能でなければならない」とされる。つまり、「反証可能性」もまた、反証される可能性の集合が、日常的な経験に限られ、時間空間的に近接した範疇における概念と見なせるようになる。こうした日常経験への限定を、《限日常性(limiting-sense-organ)》と提議したい。つまり、反証可能性には、《限日常性》が内在していることになる。

ポパーの言う「観察」とは日常的な観察によって支えられている、という指摘です⁷。また、観察が日常的な現象しか観察できない、というのは単純な経験論が持つ限界と似通っているとも指摘しました。この具体的な例として、色を挙げました。

「全ての鳥は黒い」と「白い鳥がいる」によって理論が反証されとするポパーの主張は、「黒」と「白」という色の差に留意している。「黒」と「白」は色の基本的な大別、有彩色と無彩色で、同様の無彩色に分けられる。この無彩色である「黒と白」は明度差によって区別される。例えば国際的な表色系である「修正マンセル表色系」の明度(Value)は、明るさを示し、完全吸収の理想の黒を0、完全反射の理想の白を10とし、その間を知覚的に等歩度になるように10段階に配列している。理想的な黒、あるいは白そのものは、ポパーの「普遍概念の経験的超越性」によって解決されうるにしても、具体的に黒と指し示す範囲を明度数量によって置き換えることは出来ない。何故なら、色彩感覚が各人や地域性によって変化するからである。こうした数量化されていない対象の

保持する多様性を、ポパーは観察の《限日常性》によって乗り越えようとした。ゆえに、「相互主観的にテスト可能な理論は、相互感覚的にテスト可能な理論である」とした。

しかし、反証的な側面ではなく反復的な側面の再現性を考える場合には、明度の限定が必要不可欠である。何故なら、「如何なる明度によって再現されたか」というのが問題の核心だからである。特に各人の「黒」あるいは「白」と認める範疇に相違が認められると同時に、過去の記憶の色との比較等が問題になるであろう。カントのように主観者の概念枠組みの一定性と、それが各自各時間に普遍的に妥当するのを前提としないポパーの論理では、こうした時間——記憶——と空間——他者との相違——が課題として浮上してきてしまう。つまり、「観察」と「観察可能性」と「相互主観的なテスト可能性」、そして「再現性」が、主観者の恣意による根本的な改竄に晒されてしまう。

少々長いですが、引用しました⁸。これによってポパーの反証可能性は、反証可能ではあるが反復不可能となり、再現性を持ちません。ポパーは科学を標榜し、それを元にして 20 世紀の社会主義、つまりマルクス・レーニン主義を批判しました。けれど、標榜した科学を厳密に見ていくと自然科学とは一致しませんでした。逆にそれゆえ社会主義を批判できたのではあります。

4. 哲学的知識の限界

結構長くなりましたが、ポパーの反証可能性について述べてきました。では次に、反証可能性について指摘した論点を、「哲学」に向けたいと思います。哲学に、数学的体系が必要条件に含まれているでしょうか？ 言明や論は具体的にテスト可能でしょうか？ 観察は相互主観的に観察可能なのでしょうか？ どのような要件で保証されるのでしょうか？ 哲学の知識は再現性を備えているのでしょうか？ 哲学の知識は、自然科学のような「時間・空間を超える」という性質を持っているのでしょうか？

全ての疑問に対して、「No.」だと思われます。それはポパーに対する検討項

目が当てはまるからです。ここに「対象範囲が膨大ではっきりと引けない」、「テスト不可能である」、「反復不可能である」などの点で哲学的知識の限界が示される、と思われます。続いて要点を箇条書きにした後、詳しく内容に入っていきます。

- ① 再現性がない
- ② ①から反駁性が無い。

①の「再現性」は、「時間、空間を超えて繰り返す性質」を指します。「時間と空間を超えて繰り返す」のを必要としますから、他人や未来の同じ人間や過去の事例を確かめられる、という「再現性の相互客観性」が生じます。この相互客観性を哲学的知識は持ちえません。何故なら、自然科学が「再現性」を確立する時に、数学的体系によって「自然の一回性」を、より具体的には、A) 現象の1つの側面を切り取ること、B) 測定方法によって近似値を採用すること、によって「自然の一回性」を取り除けないからです。これは、ポパーの例で挙げると、「科学」という場合に一般的な用語としての科学か、それとも一般的でない独自の「科学」か、が判断し得ない、という例や色の例になります。

もう少し比較して言いましょう。哲学で「経験」という時、その意味内容は、はっきりしているでしょうか？ していません。これと同じことが「認識」、「現象」、「懷疑」という基本的な用語で起こります。「経験」という時、誰の言う「経験」でしょうか。それによって意味内容が変わってきます。そこに再現性のような「相互客観性」は存在しません。

他方、物理学における概念、例えば「仕事」は、「 $W = Fs$ 」として明確に定義されます。仕事の記号は W 、単位の記号は $[J]$ 、力の記号は F 、単位の記号は $[N]$ 、距離の記号は $[s]$ 、単位の記号は $[m]$ と明らかなです。地域や個人や言語に依存することなく定義され、そして具体的な検証や実験によって確かめられています。

こうした原因は、単に数学的体系の欠如だけではなく、哲学の対象が、日常的な事象だけが対象でない点にも理由があります。「経験」という日常的な事象だけではなく抽象化した事象を対象としているので、主張者の個人的な世界観によって意味内容が決定されるのです。

これによって、自然科学の持つ具体的なテスト可能性を保持しえませんが、事象による厳密なテストを行えませんが、検証も行えませんが。

以上をまとめますと、①によって、論の全体的なテストが不可能、つまり、相互テスト可能性という意味での相互客観性を哲学的な知識は持ちえない、となります。

②は、①から反駁ができない、でした。これは皆さんが既に体感しているのではないのでしょうか。存在論において実在論と実念論の論争は決着が付きません。1つの原因として自然科学のように決定的実験、特にアインシュタインの決定的実験が行えないからです。

もちろん、論をドグマティックに扱うことで、決定的実験が行えない、という批判はあると思います。自然科学のように方法論的に確立した分野であっても、論はドグマティックに扱われてきました。ニュートン力学は天体観測の結果などにおいて齟齬を指摘されてはいましたが、次に代わる論が出てきて初めてドグマティックに扱われなくなりました。それゆえ、哲学的知識は2重の意味において、ドグマティックに扱われてしまう、という限界があります。

少し見方をずらしめると、①で挙げたように対象が抽象化した事象なので、C) 言明と理論全体の関係が論全体の理論負荷性によって左右される、D) 1つ1つの反駁がC) ゆえに不可能になると言い直せます。

例えば、「観察」、「経験」、「実在」といった一連の単語が、ある哲学で語られていたとします。そういう時に「観察」だけに対して反駁ができない、という意味です。反駁するのなら、「観察」、「経験」、「実在」の全てを含んだ全体に対してのみ反駁の可能性がある、という意味です。けれど、これも対象が抽象的で再現性がないですから、ドグマティックに扱った場合、反駁は不可能になります。そして反駁がされたとしても、それが決定的に行われた、と判断し得ないのです。この判断し得ない、とは論理的に判断し得ない、という意味です。個人の趣向や意向によって、あるいは有効性や支持などによる取捨選択を意味してはいません。

この点について、「哲学は何故難しい」と関係して述べていきます。最初に述べたように、物語としてあるいは道徳としてある『ホメロス』や『古事記』を私は難しく感じませんでした。その理由を改めて考えてみると、物語

や道徳として論全体の整合性や無矛盾性などの論理性を要求されていないからです。論理性を求められないので、話が前後で矛盾していても破綻しませんし、何より解釈は読者にまかされます。ゆえに読者の数だけ解釈が出てきます。他方、哲学は論理性を保持しているので、論理の取り方や論理の前後関係などが明らかです。

しかしながら、その論理性が自然科学のように相互客観性のような性質を保持していません。個人の世界観に意味内容が任されますので、その点を理解しないと全体を理解するのが困難になります。ここに哲学の難しさがあります。主張者の世界観に関与する当人の気質、言語、文化、地域性、家族関係、社会的環境などへの理解が必要になる例が挙げられます。さらにまた、先ほど挙げたように論理性の解釈においても、ドグマティックに扱おうと反駁が不可能になり、事態はさらに難しくなります。

相互客観性なく、同時にテスト不可能である種の反駁不可能性を備えている点に哲学的知識の限界がある、と言えると思います。ただ、ここにまた奥深く人間の深淵への道があるのではないか、とも感じています。

5. まとめ

この発表は、「哲学的知識の限界」というテーマでした。まず始めに、哲学の難しい理由を、次に私の専門ある K・ポパーの反証可能性についての検討を、そしてその検討を土台に哲学について踏み込みました。自然科学の必要条件である再現性を足がかりにして、哲学という広大な領域について検討しました。そうした広大な領域にも関わらず、たかだか 9 頁という短いものでした。それは本発表を聞いてくださった方々にはお分かりかと思いますが、発表時間と質問時間を考え説明的なものに終始しました。ポパーについての詳しい検討は、拙論を読んで頂きたいです。

本発表全体を振り返ると、哲学検討、哲学批判に終始しました。欠点を論じ（あげつらい）ました。けれど、「だから哲学は無用である」、「だから哲学は下らないものだ」という主張ではありません。哲学には哲学の長所と短所があっ

て、自然科学には自然科学の長所と短所がある、と考えています。それぞれの長所と短所を一緒にたにしないこと、長所しかないのだ、という見方をしないことが大切だと考えています。「哲学を王様として扱い権威にひれ伏さない」ということです。これは、今まで書いて来た通り、ポパーの《方法論的直観主義》を発展させて出てきました。

結論として「哲学的知識は、再現性が無く、それゆえ反証不可能である」としました。この点を「哲学的知識の限界」として最後にまとめとしておきます。また、哲学的知識は、その「論理性」ゆえに、緩やかな境界を保ちながら、歴史の流れに沿って無限の拡散をしていくと、工学的な思考から捉えられると考えています。

以上で、「哲学的知識の限界」を終わります。

注

¹ [L.S.D (『科学的発見の論理』)] p. 86, 104 頁

² [L.S.D]において「経験(experience)」は非常に多義的に用いられている。[L.S.D] p. 39, 47 頁には「1つの理論体系を他の理論体系から区別する方法としてあらわれる」とある。ここでは、経験科学が「理論的形式」と「特有の方法」によって特徴づけられる、という主張を意図している。この意図で明らかに「経験」という用語の論理性の強調を見て取れる。また、[L.S.D]7, 7節の「経験的基礎の問題」において「非経験的」＝「形而上学的」＝「反証不可能」という内容がある。あるいは、[L.S.D] p. 86, 104 頁に「経験的」または「反証可能的」という記述が見られる。以上の根拠から、「経験」は多義的内容を持つが、ポパーの主要な意図を省みると、「経験」は「反証可能性」によって定義されていると考えられる。

³ この点を継承すると、『科学的発見の論理』では殆ど顧みられていない「実在」との関係の曖昧さも浮かび上がる。ポパーの後期思想において実在論が注目されるが、当論文は前期を対象にしているので、後述する指摘に留めて置く。

⁴ 拙論「反証可能性とテスト可能性」5 頁

⁵ [L.S.D] p. 86, 104 頁

⁶ [L.S.D] p. 86, 104 頁

⁷ 拙論「反証可能性と再現性」9 頁

⁸ 拙論「反証可能性と再現性」9 頁

引用文献

Karl Popper, *The Logic Of Scientific Discovery* (New York: Routledge, 1997)

カール・R・ポパー『科学的発見の論理（上）』恒星社厚生閣、1993（8版）

カール・R・ポパー『科学的発見の論理（下）』恒星社厚生閣、1991（7版）

高木健治郎「反証可能性と数学的体系」ポパー哲学研究会会報、Vol.13, No.2、2001.

高木健治郎「反証可能性とテスト可能性」ポパー哲学研究会会報、Vol.14, No.2、2003.

高木健治郎「反証可能性と再現性」ポパー哲学研究会会報、Vol.15, No.2、2004.

（参考文献に関しましては、ポパー哲学研究会のHPにある、井上一夫氏が作成したリストをご参照下さい。<http://www.law.keio.ac.jp/~popper/jpslit-j.html>）

（たかぎ けんじろう／静岡産業大学）